雪渡り

宮沢賢治

雪渡り　その一（小狐（こぎつね）の紺三郎（こんざぶろう））

雪がすっかり凍（こお）って大理石よりも堅（かた）くなり、空も冷たい滑（なめ）らかな青い石の板で出来ているらしいのです。

「堅雪（かたゆき）かんこ、しみ雪しんこ。」

お日様がまっ白に燃えて百合（ゆり）の匂（におい）を撒（ま）きちらし又（また）雪をぎらぎら照らしました。

木なんかみんなザラメを掛（か）けたように霜（しも）でぴかぴかしています。

「堅雪かんこ、凍（し）み雪しんこ。」

四郎とかん子とは小さな雪沓（ゆきぐつ）をはいてキックキック

キック、野原に出ました。

　こんな面白(おもしろ)い日が、またとあるでしょうか。いつもは歩けない黍(きび)の畑の中でも、すすきで一杯(いっぱい)だった野原の上でも、すきな方へどこ迄(まで)でも行けるのです。平らなことはまるで一枚の板です。そしてそれが沢山(たくさん)の小さな小さな鏡のようにキラキラキラキラ光るのです。

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ。」

　二人は森の近くまで来ました。大きな柏(かしわ)の木は枝(えだ)も埋(うず)まるくらい立派な透(す)きとおった氷柱(つらら)を下げて重そうに身体(からだ)を曲げて居(お)りました。

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ。狐の子ぁ、嫁(よめぃ)ほしい、

ほしい。」と二人は森へ向いて高く叫びました。
　しばらくしいんとしましたので二人はも一度叫ぼう
として息をのみこんだとき森の中から
「凍み雪しんしん、堅雪かんかん。」と云いながら、キ
シリキシリ雪をふんで白い狐の子が出て来ました。
　四郎は少しぎょっとしてかん子をうしろにかばって、
しっかり足をふんばって叫びました。
「狐こんこん白狐、　お嫁ほしけりゃ、　とってやろよ。」
　すると狐がまだまるで小さいくせに銀の針のような
おひげをピンと一つひねって云いました。
「四郎はしんこ、　かん子はかんこ、　おらはお嫁はいら

ないよ。」
四郎が笑って云いました。
「狐こんこん、狐の子、お嫁がいらなきゃ餅(もち)やろか。」
すると狐の子も頭を二つ三つ振(ふ)って面白そうに云いました。
「四郎はしんこ、かん子はかんこ、黍の団子をおれやろか。」
かん子もあんまり面白いので四郎のうしろにかくれたままそっと歌いました。
「狐こんこん狐の子、狐の団子は兎(うさ)のくそ。」
すると小狐紺三郎が笑って云いました。

「いいえ、決してそんなことはありません。あなた方のような立派なお方が兎（うさぎ）の茶色の団子なんか召（め）しあがるもんですか。私らは全体いままで人をだますなんてあんまりむじつの罪をきせられていたのです。」

四郎がおどろいて尋（たず）ねました。

「そいじゃきつねが人をだますなんて偽（うそ）かしら。」

紺三郎が熱心に云いました。

「偽ですとも。けだし最もひどい偽です。だまされたという人は大抵（たいてい）お酒に酔（よ）ったり、臆病（おくびょう）でくるくるしたりした人です。面白いですよ。甚兵衛（じんべえ）さんがこの前、月夜の晩私たちのお家（うち）の前に坐（すわ）って一晩じょうるりを

やりましたよ。私らはみんな出て見たのです。」

　四郎が叫びました。

「甚兵衛さんならじょうるりじゃないや。きっと浪花(なにわ)ぶしだぜ。」

　子狐紺三郎はなるほどという顔をして、

「ええ、そうかもしれません。とにかくお団子をおあがりなさい。私のさしあげるのは、ちゃんと私が畑を作って播(ま)いて草をとって刈(か)って叩(たた)いて粉にして練ってむしてお砂糖をかけたのです。いかがですか。一皿(さら)さしあげましょう。」

と云いました。

と四郎が笑って、

「紺三郎さん、僕らは丁度いまね、お餅をたべて来たんだからおなかが減らないんだよ。この次におよばれしようか。」

子狐の紺三郎が嬉(うれ)しがってみじかい腕(うで)をばたばたして云いました。

「そうですか。そんなら今度幻燈会(げんとうかい)のときさしあげましょう。幻燈会にはきっといらっしゃい。この次の雪の凍った月夜の晩です。八時からはじめますから、入場券をあげて置きましょう。何枚あげましょうか。」

「そんなら五枚お呉(く)れ。」と四郎が云いました。

「五枚ですか。 あなた方が二枚にあとの三枚はどなたですか。」 と紺三郎が云いました。

「兄さんたちだ。」 と四郎が答えますと、

「兄さんたちは十一歳以下ですか。」 と紺三郎が又尋ねました。

「いや小兄(ちいにい)さんは四年生だからね、 八つの四つで十二歳。」 と四郎が云いました。

すると紺三郎は 尤(もっと)もらしく又おひげを一つひねって云いました。

「それでは残念ですが兄さんたちはお断わりです。 あなた方だけいらっしゃい。 特別席をとって置きますか

ら、面白いんですよ。幻燈は第一が『お酒をのむべからず。』これはあなたの村の太右衛門さんと、清作さんがお酒をのんでとうとう目がくらんで野原にあるへんてこなおまんじゅうや、おそばを喰べようとした所です。私も写真の中にうつっています。第二が『わなに注意せよ。』これは私共のこん兵衛が野原でわなにかかったのを画いたのです。絵です。写真ではありません。第三が『火を軽べっすべからず。』これは私共のこん助があなたのお家へ行って尻尾を焼いた景色です。ぜひおいで下さい。」

二人は悦んでうなずきました。

狐(きつね)は可笑(おか)しそうに口を曲げて、キックキックトントンキックキックトントンと足ぶみをはじめてしっぽと頭を振ってしばらく考えていましたがやっと思いついたらしく、両手を振って調子をとりながら歌いはじめました。

「凍(し)み雪しんこ、堅雪かんこ、
　野原のまんじゅうはポッポッポ。
酔ってひょろひょろ太右衛門が、
　去年、三十八、たべた。
凍み雪しんこ、堅雪かんこ、
　野原のおそばはホッホッホ。

酔ってひょろひょろ清作が、

　　去年十三ばいたべた。」

四郎もかん子もすっかり釣り込まれてもう狐と一緒に踊っています。

キック、キック、トントントン。キック、キック、トントン。キック、キック、キック、キック、トントントントン。

四郎が歌いました。

「狐こんこん狐の子、去年狐のこん兵衛が、ひだりの足をわなに入れ、こんこんばたばたこんこんこん。」

かん子が歌いました。

「狐こんこん狐の子、去年狐のこん助が、焼いた魚を取ろとしておしりに火がつききゃんきゃんきゃん。」

キック、キック、トントン。キック、キック、トントン。キック、キック、キック、キックトントントントン。

そして三人は踊りながらだんだん林の中にはいって行きました。赤い封蠟細工のほおの木の芽が、風に吹かれてピッカリピッカリと光り、林の中の雪には藍色の木の影がいちめん網になって落ちて日光のあたる所には銀の百合が咲いたように見えました。

すると子狐紺三郎が云いました。

「鹿の子もよびましょうか。鹿の子はそりゃ笛がうま

いんですよ。」

四郎とかん子とは手を叩いてよろこびました。そこで三人は一緒に叫びました。

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ、鹿(しか)の子ぁ嫁ぃほしいほしい。」

すると向うで、

「北風ぴいぴい風三郎、西風どうどう又三郎」と細いいい声がしました。

狐の子の紺三郎がいかにもばかにしたように、口を尖(とが)らして云いました。

「あれは鹿の子です。あいつは臆病ですからとても

こっちへ来そうにありません。けれどもう一遍(いっぺん)叫んでみましょうか。」

そこで三人は又叫びました。

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ、しかの子ぁ嫁(よめい)ほしい、ほしい。」

すると今度はずうっと遠くで風の音か笛の声か、又は鹿の子の歌かこんなように聞えました。

「北風ぴいぴい、かんこかんこ
　西風どうどう、どっこどっこ。」

狐(きつね)が又ひげをひねって云いました。

「雪が柔(やわ)らかになるといけませんからもうお帰りなさ

い。今度月夜に雪が凍ったらきっとおいで下さい。さっきの幻燈をやりますから。」

そこで四郎とかん子とは「堅雪かんこ、凍み雪しんこ。」と歌いながら銀の雪を渡っておうちへ帰りました。

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ。」

雪渡（ゆきわた）り　その二（狐小学校の幻燈会）

青白い大きな十五夜のお月様がしずかに氷（ひ）の上山（かみやま）から登りました。

雪はチカチカ青く光り、そして今日も寒水石(かんすいせき)のように堅(かた)く凍(こお)りました。

四郎は狐の紺三郎との約束(やくそく)を思い出して妹のかん子にそっと云いました。

「今夜狐の幻燈会なんだね。行こうか。」

するとかん子は、

「行きましょう。行きましょう。狐こんこん狐の子、こんこん狐の紺三郎。」とはねあがって高く叫(さけ)んでしまいました。

すると二番目の兄さんの二郎が

「お前たちは狐のとこへ遊びに行くのかい。僕(ぼく)も行き

たいな。」と云いました。

四郎は困ってしまって肩(かた)をすくめて云(い)いました。

「大兄(おおにい)さん。だって、狐の幻燈会は十一歳までですよ、入場券に書いてあるんだもの。」

二郎が云いました。

「どれ、ちょっとお見せ、ははあ、学校生徒の父兄にあらずして十二歳以上の来賓(らいひん)は入場をお断わり申し候(そろ)、狐なんて仲々うまくやってるね。僕はいけないんだね。仕方ないや。お前たち行くんならお餅(もち)を持って行っておやりよ。そら、この鏡餅がいいだろう。」

四郎とかん子はそこで小さな雪沓(ゆきぐつ)をはいてお餅をか

ついで外に出ました。
兄弟の一郎二郎三郎は戸口に並(なら)んで立って、
「行っておいで。大人の狐にあったら急いで目をつぶるんだよ。そら僕ら囃(はや)してやろうか。堅雪かんこ、凍(し)み雪しんこ、狐の子ぁ嫁(よめ)ぃほしいほしい。」と叫びました。

お月様は空に高く登り森は青白いけむりに包まれています。二人はもうその森の入口に来ました。

すると胸にどんぐりのきしょうをつけた白い小さな狐の子が立って居て云いました。

「今晩は。お早うございます。入場券はお持ちです

か。」

「持っています。」二人はそれを出しました。

「さあ、どうぞあちらへ。」狐の子が尤もらしくからだを曲げて眼をパチパチしながら林の奥を手で教えました。

林の中には月の光が青い棒を何本も斜めに投げ込んだように射して居りました。その中のあき地に二人は来ました。

見るともう狐の学校生徒が沢山集って栗の皮をぶっつけ合ったりすもうをとったり殊におかしいのは小さな小さな鼠位の狐の子が大きな子供の狐の肩車に

乗ってお星様を取ろうとしているのです。

みんなの前の木の枝に白い一枚の敷布がさがっていました。

不意にうしろで

「今晩は、よくおいででした。先日は失礼いたしました。」という声がしますので四郎とかん子とはびっくりして振り向いて見ると紺三郎です。

紺三郎なんかまるで立派な燕尾服を着て水仙の花を胸につけてまっ白なはんけちでしきりにその尖ったお口を拭いているのです。

四郎は一寸お辞儀をして云いました。

「この間は失敬。それから今晩はありがとう。このお餅をみなさんであがって下さい。」
狐の学校生徒はみんなこっちを見ています。
紺三郎は胸を一杯（いっぱい）に張ってすまして餅を受けとりました。
「これはどうもおみやげを戴（いただ）いて済みません。どうかごゆるりとなすって下さい。もうすぐ幻燈もはじまります。私は一寸失礼いたします。」
紺三郎はお餅を持って向うへ行きました。
狐の学校生徒は声をそろえて叫びました。
「堅雪かんこ、凍（し）み雪しんこ、硬（かた）いお餅はかったらこ、

白いお餅はべったらこ。」

幕の横に、

「寄贈(きぞう)、お餅沢山、人の四郎氏、人のかん子氏」と大きな札(ふだ)が出ました。狐の生徒は悦(よろこ)んで手をパチパチ叩(たた)きました。

その時ピーと笛(ふえ)が鳴りました。

紺三郎がエヘンエヘンとせきばらいをしながら幕の横から出て来て丁寧(ていねい)にお辞儀をしました。みんなはしんとなりました。

「今夜は美しい天気です。お月様はまるで真珠(しんじゅ)のお皿(さら)です。お星さまは野原の露(つゆ)がキラキラ固まったようで

す。さて只今（ただいま）から幻燈会をやります。みなさんは瞬（またたき）やくしゃみをしないで目をまんまろに開いて見ていて下さい。

それから今夜は大切な二人のお客さまがありますからどなたも静かにしないといけません。決してそっちの方へ栗の皮を投げたりしてはなりません。開会の辞です。」

みんな悦んでパチパチ手を叩きました。そして四郎がかん子にそっと云いました。

「紺三郎さんはうまいんだね。」

笛がピーと鳴りました。

『お酒をのむべからず』大きな字が幕にうつりました。そしてそれが消えて写真がうつりました。一人のお酒に酔(よ)った人間のおじいさんが何かおかしな円いものをつかんでいる景色です。

みんなは足ぶみをして歌いました。

キックキックトントンキックキックトントン

凍み雪しんこ、堅雪かんこ、

　野原のまんじゅうはぽっぽっぽ

酔ってひょろひょろ太右衛門(たえもん)が

　去年、三十八たべた。

キックキックキックキックトントントン

写真が消えました。四郎はそっとかん子に云いました。

「あの歌は紺三郎さんのだよ。」

別に写真がうつりました。一人のお酒に酔った若い者がほおの木の葉でこしらえたお椀(わん)のようなものに顔をつっ込(こ)んで何か喰(た)べています。紺三郎が白い袴(はかま)をはいて向うで見ているけしきです。

みんなは足踏(あしぶ)みをして歌いました。

キックキックトントン、キックキックトントン、トントン、
凍み雪しんこ、堅雪かんこ、
野原のおそばはぽっぽっぽ、

酔ってひょろひょろ清作が
　　去年十三ばい喰べた。

キック、キック、キック、キック、トン、トン、トン。

写真が消えて一寸(ちょっと)やすみになりました。

可愛(かあい)らしい狐の女の子が黍団子(きびだんご)をのせたお皿を二つ持って来ました。

四郎はすっかり弱ってしまいました。なぜってたった今太右衛門と清作との悪いものを知らないで喰べたのを見ているのですから。

それに狐の学校生徒がみんなこっちを向いて「食う

だろうか。ね。食うだろうか。」なんてひそひそ話し合っているのです。かん子ははずかしくてお皿を手に持ったまままっ赤になってしまいました。すると四郎が決心して云いました。

「ね、喰べよう。お喰べよ。僕(ぼく)は紺三郎さんが僕らを欺(だま)すなんて思わないよ。」そして二人は黍団子をみんな喰べました。そのおいしいことは頬(ほ)っぺたも落ちそうです。狐の学校生徒はもうあんまり悦んでみんな踊りあがってしまいました。

キックキックトントン、キックキックトントン。

「ひるはカンカン日のひかり

よるはツンツン月あかり、
たとえからだを、さかれても
狐の生徒はうそ云うな。」
キック、キックトントン、キックキックトントン。
「ひるはカンカン日のひかり
よるはツンツン月あかり
たとえこごえて倒(たお)れても
狐の生徒はぬすまない。」
キックキックトントン、キックキックトントン。
「ひるはカンカン日のひかり
よるはツンツン月あかり

たとえからだがちぎれても
狐の生徒はそねまない。」

キックキックトントン、キックキックトントン。

四郎もかん子もあんまり嬉しくて涙がこぼれました。

笛がピーとなりました。

『わなを軽べっすべからず』と大きな字がうつりそれが消えて絵がうつりました。狐のこん兵衛がわなに左足をとられた景色です。

「狐こんこん狐の子、去年狐のこん兵衛が
左の足をわなに入れ、こんこんばたばた

こんこんこん。」

とみんなが歌いました。

四郎がそっとかん子に云いました。

「僕の作った歌だねい。」

絵が消えて『火を軽べっすべからず』という字があらわれました。それも消えて絵がうつりました。狐のこん助が焼いたお魚を取ろうとしてしっぽに火がついた所です。

狐の生徒がみな叫びました。

「狐こんこん狐の子。去年狐のこん助が
焼いた魚を取ろとしておしりに火がつき

きゃんきゃんきゃん。」

笛がピーと鳴り幕は明るくなって紺三郎が又出て来て云いました。

「みなさん。今晩の幻燈はこれでおしまいです。今夜みなさんは深く心に留(と)めなければならないことがあります。それは狐のこしらえたものを賢(かしこ)いすこしも酔わない人間のお子さんが喰べて下すったという事です。そこでみなさんはこれからも、大人になってもうそをつかず人をそねまず私共狐の今迄(いままで)の悪い評判をすっかり無くしてしまうだろうと思います。閉会の辞です。」

狐の生徒はみんな感動して両手をあげたりワーッと立ちあがりました。そしてキラキラ涙をこぼしたのです。

紺三郎が二人の前に来て、丁寧におじぎをして云いました。

「それでは。さようなら。今夜のご恩は決して忘れません。」

二人もおじぎをしてうちの方へ帰りました。狐の生徒たちが追いかけて来て二人のふところやかくしにどんぐりだの栗だの青びかりの石だのを入れて、

「そら、あげますよ。」「そら、取って下さい。」なんて

云って風の様に逃(に)げ帰って行きます。
紺三郎は笑って見ていました。
二人は森を出て野原を行きました。
その青白い雪の野原のまん中で三人の黒い影(かげ)が向うから来るのを見ました。　それは迎(むか)いに来た兄さん達でした。

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社
１９９０（平成２）年５月25日発行
１９９７（平成９）年５月10日17刷
初出：「愛国婦人」
１９２１（大正10）年12月号、１９２２（大正11）年１月号
入力：土屋隆
校正：田中敬三
２００６年３月22日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。